

—チェルノブイリに学ぶ— 「ウクライナボランティア治療・セミナー報告」

血液循環療法協会・専門学院会長 大杉幸毅

2015年11月22日から10日間、NPO法人「食品と暮らしの安全基金」（代表小若順一）主催の「チェルノブイリ子供の痛みをなくするプロジェクト」に招待され、チェルノブイリ原発の見学、子供たちの治療、父兄に家庭療法講習会（セミナー）、現地のボランティア団体との交流、キエフバレエのバレリーナの治療など行ってきました。

—昨年3月に私の代理として古田会員を派遣して治療に大きな成果を上げました。今回の私の目的は、四肢麻痺のワジム君、ミーシャ君の体の状態を確認して更に良くするように治療すること、低線量被曝の愁訴（頭痛、足痛など）を持つ子供たちの体の状態と循環療法の治療効果の確認、父兄に治療法を指導することでした。そして、この体験をもとに福島健康障害に対応することです。

1) チェルノブイリ原発現場見学

22日夜キエフ空港に到着し、市内のホテルに1泊、翌日マイクロバスでチェルノブイリ原発に向かった。キエフから北へ約130Km、渋滞の市街地を抜けると森と畑が延々と続く。道はだんだん悪くなりガタガタ道。約2時間走り、立ち入り禁止の30Km圏の検問につく。警察官が警備していて撮影禁止であった。許可証とパスポートを提示して入る。そこから、15分くらい走ってチェルノブイリ市の入り口の標識に着く。原発犠牲者の慰霊塔、殉職消防士のメモリアル、原発事故20周年メモリアル公園にはヨハネ黙示録のラッパを吹く天使の像が立ち、廃村になった村々の標識が延々と立ち並ぶ。そこから車でさらに行くと森の中に点々と見えた。（写真1）



中には立ち入り禁止を無視して暮らしている老人がいた。さらに30分くらい走って原発の遠くに煙突が見えてくる。冷却水用の水路のわきを走る。いよいよ原発だ。車内で線量計を出し計測したら $0.6\mu\text{SV}$ 以上、原発に近付くにつれてどんどん上がり警報は鳴りっぱなしだ。3~4 μSV まで上がった。

不気味だ。不安になるが来た以上じたばたしても仕方がない。爆発を起こした4号炉は石棺に覆われているが、かなり痛んでいるようだ。耐用年数30年ということだ。今年は横

に建設中の 100 年もつシェルターで覆う予定。(写真 2) 写真を撮ったら早々と立ち去る。



次に廃墟となった原発都市プリピャチへ。

(写真 3) 原発従業員たちの宿舎、庁舎、ホテル、文化施設、娯楽施設、スーパーマーケット、遊園地など 29 年たつて道路は自然に生えた木や草で覆われ、建物は廃墟と化し、死の街である。歩いていると、ヨモギが自生しているのを見つけた。これがニガヨモギか？

その後、ホールボディカウンターで検査を受けた後、恐怖の「原発食堂」で食事を摂った。天気がどんより曇り、うすら寒く、余計に嫌な気分になった。こんなことを 2 度と起こしてはいけないのに、また福島で起こしてしまった。人間はなんと愚かなものか。そしてまた再稼働を推進する政府。原発推進者に一度来て見てもらいたい。中国の沿岸部、韓国も今後原発増設計画がある。事故を起こしたら放射能は日本に飛来し被曝は確実。狭い日本は住むところがなくなる。もはや取返しのできないところへ来てしまったのか？これから福島県や近隣で健康障害が増えるであろう。しかも、何世代も原爆症で苦しむのだ。

チェルノブイリの都市伝説

ヨハネ黙示録に『第三の御使が、ラッパを吹き鳴らした。すると、たいまつのように燃えている大きな星が、空から落ちてきた。そしてそれは、川の三分の一とその水源との上に落ちた。』(写真 4)『この星の名は「苦よもぎ」と言い、水の三分の一が「苦よもぎ」のように苦くなった。水が苦くなったので、そのために多くの人が死んだ。』この記事は、チェルノブイリの原発事故が思い出される (1986 年)。チェルノブイリはプリピャチ川が原発のすぐ横を流れ、キエフ湖、ドニエプル川へと流れ込んでおり、このプリピャチ川が猛烈な放射能汚染をしている。そして 3500 万人が利用している水源の貯水池が、その原発の近くにあるという。チェルノブイリという名はロシア語で「苦よもぎ」という意味である。ロシア語の大辞典には、「чернобыльник (植) にかよもぎの一種」と記されている。



2) 血液循環療法セミナー

11月24日モジャリ村学校を訪問、午後から「血液循環療法のセミナー」を講堂でやった。参加者は、モジャリ村学校校長以下教職員、村長、父兄、土壌研究者のニコライ博士（ウクライナ生物資源環境利用国立大学研究所）、タチアナさん（現地市民団体「希望」代表・地方議会議員）など20数名。（写真5）



写真5

最初に、血液循環療法の理論と基本実技を簡単に説明して、「悪いところにはシコリがあり、その部の循環を良くすればすぐに痛みが取れます。では、本当に取れるどうかやってみましょう。」といて、「今、痛みがある人は出てきてください。」というので、肥満気味の68歳の女教師が「膝が痛い」といって出てきてくれた。

そこで、ベッドにあおむけになってもらい、痛みのある部位（膝蓋骨内側下方）を触診すると、圧痛性のシコリがあった。「では、循環を良くします。」といて、循環を良くする循環療法独自の手技（ジワー・パツ：漸増急減圧）をやり、数分で痛みを取った。「では、立ってしゃがんでみてください。」「あらー・痛くないワ！」で大喝采と拍手。（写真6.7）



写真6



写真7

「では、他にいませんか？」すると白いセーターのやや肥満気味の女教師が「首が痛い」と訴えて出てきた。第7頸椎側縁の僧帽筋が凝っていたのでやり方を解説しながら治療してすぐに軽くした。今度は、「腰が痛い」と訴えるので、うつぶせにして左腰方形筋外縁部のシコリを見つけ押圧しながら「ここが痛いでしょ？」「ダー（そうです）」「では治します。」と言って、「ジワー・パツ」すぐに痛みが取れた。では「立って確認してください。」「あー

ら・痛くない！！」「ハラショー！」(いいわ)「プラーシーバ！」(ありがとう)と大成功。
(写真 8.9.10)



写真 8



写真 9



写真 10

更に 3 人目も腰痛の若い女教師。臀部の仙骨外縁に圧痛性のシコリがありこの部を治療すると、前屈が軽く出来て痛みが取れた。親指を立てて「OK サイン」。(写真 11.12.13.)



写真 11



写真 12



写真 13

最初硬い表情だった参加者も、興味を示してだんだん乗ってきた。そこで、実技練習。お互いに肩で押圧の練習をしてもらいながら、私が全員の肩を押圧して、圧度や指の離すタイミングを体験してもらった。皆さん、私が肩を押圧すると大変気持ちがいいと喜んでた。これは日本人と同じ。(写真 14)



写真 14

次に、自己治療のやり方を頸、肩、腰、お腹の部位で説明した。やり方を紹介した「DVDブック・押圧メソッド」(マキノ出版)とオールカラー写真で紹介した「血液循環健康法」「血液循環療法入門」(たにぐち書店)を校長に渡し、セミナーを終えた。終わってから、「私も治療してほしい」と寄ってこられ胃痛と腰痛の女性を治療して良くした。

(「血液循環療法セミナー(チェルノブイリ原発事故ボランティア 大杉先生 講習会) <https://youtu.be/kp1G43shDhU>」ユーチューブ動画参照)

3) 内部被ばく健康障害の子供たちの治療

11月23日(月)朝、ホテルで四肢麻痺のミーシャ君のお腹を診た。やはり予想通り臍部硬結があった。これは瘀血^{おけつ}の腹症(注)。ワジム君も同じだった。

24日(火)モジャリ村学校を訪問し、最初に手の甲が痛いと訴える女性職員を治療して良くした。次に、両下腿部後面(ふくらはぎ)が痛い肥満気味の女の子の治療を頼まれ、すぐに痛みを取った。セミナーでは体験治療をし、セミナー終了後も2人を治療し良くした。

25日(水)ナロジチの学校を訪問し、頭痛の男の子、ひざ痛の女の子、心臓病の歩けない男の子の治療をして良くした。(写真15.16.17)



写真 15



写真 16



写真 17

26日(木)ピツァニツア村学校を訪問し、ひざ痛の女の子と男の子、頭痛の上級生の女の子を治療し良くした。

28日(土)ホテルの部屋でミーシャ君とワジム君の治療をしながら現地のマッサージ師にやり方を指導した。ウクライナのマッサージのやり方は日本のマッサージとほぼ同じである。休憩時間に通訳のバレンチーナさんが腹痛を訴えておられたので治療して治した。また、ツアー参加の日本人からも治療を頼まれて施術し、自己治療を教えた。

29日(日) ウクライナ国立歌劇場で日本でも有名なバレエ教師(舞台監督)アラ・ラコダさん(78歳)とその弟子で若手ソリスト(バレエコンクールで金賞5回受賞者)のオレーシャ・シャイタノワさんの治療をした。アラさんは首肩の凝りだったが治療の後、ニコッと笑って両親指を立ててOKマークをされた。

オレーシャさんは体重をかけると右(足首)内果の外側と内側の2か所が痛いと言った。そこでベッドにまず伏臥位になってもらい、内果内側の痛みを訴えた部位を触診すると、圧痛性の硬結部が直ぐに判った。慢性炎症を起こしているようだったので、この部をソフトに集中的に治療すると、痛みが軽減し軟化した。次に、仰臥位になってもらい、内果外側部の硬化した腱を治療して緩め痛みを取った。

ベッドから降りて体重をかけて試してもらおうと、土踏まずに少しの痛みが残っていたので、この部を軽く治療して痛みを取った。又ベッドから降りて膝と股関節を深く屈曲して体重をかけても痛みがなくなり、「オオー」と感動した様子。ニコッと微笑みながら両手を合わせてお辞儀をし、日本語で「ありがとう」と言った。念のため、自己治療のやり方も教えた。キエフバレエ団にはトレーナーもいると思うがよくなっていなかったのだ。バレリーナにとって足首は一番酷使する部位なので故障も多いし、一番大事な部位だろう。循環療法を施術すれば早く治すことができるのだ。(写真 18.19) (「キエフバレエのバレリーナの治療」<https://youtu.be/WdVXM20dfkk> (ユーチューブ動画参照))



30日(月) ザプルーカ(がんの子供を支援する施設)を訪問し、神経芽腫の手術をした下肢麻痺の後遺症の男の子と施設長のナターリヤさんの治療をした。(写真 20) 男の子の下肢は麻痺して動かなかったが、拘縮を緩めて動きを良くした。ナターリヤさんは首肩が大変凝っていたが、治療して軽くなり喜ばれた。次に、「チェルノブイリ連盟」の事務所を訪問し、連盟代表と2名の女性スタッフの肩頸を治療して喜ばれた。



12月1日(火)小若代表が腰痛になり、2回治療して改善し、帰りの長時間の飛行に耐えることができた。相当慢性化していた。滞在中、ワジム君の治療は朝と晩2回、計9回施術した。(治療延べ人数約37人) 治療すべてに効果を上げ、その場で良くした。

今回施術した対象者は、セミナーで運動器系に愁訴を持つ中高年の方たち、小学校の生徒たち四肢麻痺を持つ子供など延べ30人以上のウクライナの人たちを治療した。その結果、放射線被曝が原因であっても、「悪いところにはシコリがあり、血液循環療法が有効で、効果があった」ということだ。福島で起こっている健康障害も「血液循環療法で対処」できることが実証できた。また、ウクライナの女性の中には日本人と同じ瘀血体質の人がいるということも解った。ウクライナの人たちは高カロリー・高脂肪食で肥満体が多く(特に中年以降)、運動器系では腰痛・ひざ痛、生活習慣病では心臓病やがんが多いという印象だった。

(注) 瘀血の腹症

瘀血は漢方理論で末梢の血液循環が悪く、様々な愁訴が現れる病理概念。臍下部に圧痛性の硬結が現れる。

4) 四肢麻痺のワジム君の治療

昨年寝たままの状態から歩けなかったワジム君を古田治療士が介護付きで歩けるようにまでした。今回は更に良くなるように治療することと、問題がどこにあるのか見極めること。最初に気になっていたお腹を触診したら、やはり瘀血の腹症があった。すなわち、臍部硬結があったのでこのシコリを解消するように治療して何回かやるうちに軟化した。歩き方を観察すると、足の上がりが悪く、引きずっていた。そこでそけい(脚の付け根)直下部の腸腰筋、大腿直筋を触診すると硬化が認められたので、この部を集中的に治療し軟化した。手の不随意運動は、話を聞くとずいぶんよくなっている。

去年は自分で食事もできない状態だったが、今回はお菓子を自分の手で受け取って食べることができるようになった。しかし、動きはまだ完全ではないので、頭と上肢の治療も良くやった。オルヴチ滞在中出来る限り治療し、朝は7時半から夜は7時から1日2回治療し(計9回治療)、お母さんが片手で支えるだけで歩けるまでになり、歩き方も力強く早くなった。足も引きずらなくなり、良く上がるようになった。しゃべり方もはっきり発音できるようになり、話す内容も10歳とは思えないくらい大人びたことを喋り、最後のインタビューでは両親になり替わり「ここまで良くしてくれてありがとう。また、家まで買ってくれありがとう。おかげで、僕の部屋も出来るよ。」と言って、みんなを感動させ、私たちは涙ぐんだ。頭の働きも良くなったのだと実感した。去年は「歩くようになりたい」というのが希望だったが、今回は「勉強して将来コンピューターの仕事がしたい。」と自分で話し、さらに意欲が出て進歩したことを確認できて一行は喜んだ。(写真 21.22)

最後にワジム君の両親に、治療のやり方を指導した。(「歩けない子供が奇跡の改善2 チェルノブイリボランティア治療」<https://youtu.be/S-MYTiNO--o> ユーチューブ動画参照)



写真 21



写真 22

5) 「食品と暮らしの安全基金」の活動—今なぜ、チェルノブイリなのか？

24日(火)モジャリ村学校を訪問した。女校長以下教職員が玄関で我々一行を出迎え、校長室に招かれてから講堂へ。そこで子供たちの歓迎の歌と踊り。そのあと歓迎行事、校長以下幹部教員が前に立って挨拶をして、手作りパンを小若代表に手渡した。これがウクライナの歓迎のセレモニーだそうだ。昼食会は学校の調理室で作ったウクライナ料理が所狭しとテーブルに並べられ、自家製ウオッカで乾杯だ。ウクライナでは必ず3回乾杯するそうだ。1回目は「友情に」2回目は「健康に」3回目は「女性に」、で3回目だけは男性は起立して乾杯するのが習わしとか。口当たりがいいのでついつい飲んだら、ドンドンついであられた。ウクライナの方たちは昼間から強い酒(アルコール度数40度)を飲んでも平気のようだ。(写真23)



写真 23

25日(水)ナロジチ区長を訪問し、小若代表が日本政府から援助を引き出すように要請するように助言した。次にナロジチ学校の子供たちと父兄の健康調査をした。続いて自家製牛乳を飲んでいる家庭を訪問して聞き取り調査をし、共同牧草地も調査した。線量を計測すると $0.41\mu\text{SV}$ あった。牛糞が多く散らばっていてキノコも生えていた。牛がキノコや草を食べこれで牛乳が汚染されるようだ。

26日(木)ピシャニツア村学校を訪問し、同じように子供たちの歓迎の歌と踊りそしてまた手作りのウクライナ料理と自家製ウオッカで校長先生自らもてなしてくれた。そこから歩いてカンパ金(「食品と暮らしの安全基金」で募集)で新しく買ったワジム君の家を訪問した。27日(金)原発から32Kmのラディンカ村女村長を訪問し、続いて農家のナターリヤ一家の家庭を訪問して聞き取り調査をし、手料理でもてなしてもらった。こんなに大歓迎されてもてなしてくれるのは、過去3年間小若代表がこの地域に援助をして大きな貢献をしているからである。今回のウクライナツアーは6回目になる。

チェルノブイリに学ぶ—成果を上げている「日本プロジェクト」

そもそも、小若代表がチェルノブイリに注目したのは福島原発事故が起きてから「日本の健康被害はどうなるのだろう？」と考えた時にウクライナでの調査をしてみようと考えた。

2012年に最初の調査をした時に非汚染地域で「足が痛い」と訴える子供に出会い「オカシイ」と直感し、更に第三種汚染地域(チェルノブイリ法で定められた年間被ばく 1mSV 以上の地域)の学校で調査をしたら足が痛い、頭が痛い、のどが痛いなど体の異常を訴える子供が異常に多いのに、測定線量はさほど高くはなかった。そこで森で取れるキノコ、ベリー類、川魚を食べさせないで、汚染されていない食糧を提供して調べたら良くなった。原因は

内部被ばくではないかと考え、自家菜園に化学肥料を提供して投入させ、更にミネラル豊富な粉末だしなどを提供してから調査したら、子供たちが良くなってきたのだ。更に四肢麻痺のミーシャ君やワジム君も見違えるほど良くなっていた。現地婦人団体「希望」の代表タチアナさん、学校の校長、村長、研究者などを巻き込んで支援運動が広がり、いつしか「日本プロジェクト」と現地で呼ばれるようになった。

在ウクライナ日本大使館に「草の根プロジェクト」の支援要請のため、今回大使館を訪問し参事官に説明してきた。一民間団体の募金だけでは限界がある。ロシアとの紛争以来ウクライナはヨーロッパの最貧国に陥っていて、豊かな日本の支援を必要としているのだ。そして子供たちを良くして実証し、それがこれから起こる福島の子供たちの健康障害を良くすることにつながるのだ。ところが、IAEA (International Atomic Energy Agency ; 国際原子力機関) は、放射能被曝の健康障害はがんや白血病だけしかいっていない。しかし、セシウム、ストロンチウムに汚染された農作物や食品を長期間摂取することによる内部被ばくは、体内に活性酸素を発生させ遺伝子や細胞を傷つけ、心筋の障害、免疫力低下、貧血などあらゆる疾患や愁訴を作ることが、ウクライナの医師や研究者の論文で発表されている。(「チェルノブイリ 28年後の子供たちは今」 OurPlanetTV 制作。) 福島健康障害も小若さんたちの活動もマスコミでは一切報道されない。どうしてだろうか？

28,29日(土・日)はこのプロジェクトに関係した村長、校長、研究者、父兄など総勢50人近くがホテルで合宿交流会を開き、『未来を安全にする教師の会』が小若さんの肝煎で結成され、活動資金も寄付した。穀物で放射能を減らした牛乳を学校に提供しながら、放射能の人体悪影響を発信する活動を行う。(写真24)



30日(月)「ザポルーカ」と「チェルノブイリ同盟」を訪問し除染について意見を聞き、交流会を行なった。12月1日(火)血液学者セルゲイ・クリメンコに「5年目からのがん発生状況」、ウラジミル・ブズノフ教授に「原発事故から5年までと、5～10年までの病気発生」を講義してもらった。日本大使館訪問し、小若代表が参事官に草の根活動の説明と支援要請をした。

夜、帰国の途についた。(「チェルノブイリボランティア総集編」<https://youtu.be/gJSlyq6K0U0> YouTube動画) HP「血液循環療法」(<http://www.sikori.jp/>)でも公開。

これからの「フクシマ」そして「ニッポン」の選択

放射線治療の専門家西尾正道氏（北海道がんセンター名誉院長）によると、「外部被曝よりも問題は内部被曝である。放射線はDNAを傷つけて細胞を癌化させるだけでなく、体内の水のO-H結合を切断して活性酸素を発生させる。活性酸素もまたDNAを傷つけ癌を発生させるだけでなく、血管壁、細胞膜などを傷つけ動脈硬化を始めあらゆる病気、老化の原因となる。セシウム137は心筋を始め骨格筋など全身に、ストロンチウム90は主に骨に、ヨウ素131は甲状腺に、プルトニウム239は肺に取り込まれ影響を及ぼす。セシウムとカリウム、ストロンチウムとカルシウムは同族で同じ動態を示す。農地に化学肥料を投入して農作物が放射性物質の吸収を低下するのは、カリウムが多いとセシウムが、カルシウムが多いとストロンチウムの農作物への吸収が阻害されるからである。」

低線量被曝地域に頭痛や足痛が多いのはセシウムが筋細胞を傷害して炎症を起こし循環障害となり、結果的にシコリを作っているのではないだろうか。この部に循環療法を施せば酸素が供給されて炎症が解消され良くなると思われる。他の心臓疾患などの障害でも循環療法は過去の症例から有効であるといえる。

日本では現在もなお被曝による健康被害は報道されていない、爆発当初に現場の作業員や周辺住民の方々には相当に被曝されただろう。ネット情報では、原発作業員は癌死800人（東北大学附属病院）、心臓病などの死亡者4300人（東電がお金を出して口止め）などの情報が出ている。

福島では子供の甲状腺がんが150人を超えたそうだが、国は認めていない。5年たたないうちにこれだけの数が出たということはチェルノブイリよりひどいことになる。他に増えている病気は、甲状腺がんだけでなく、2013年の統計で、全国平均より福島の死亡率が1.4倍以上高い病気は、内分泌・栄養及び代謝疾患（1.40倍）皮膚がん（1.42倍）脳血管疾患（1.44倍）糖尿病（1.46倍）脳梗塞（1.60倍）そしてセシウムが蓄積しやすい心臓の病気は、急性心筋梗塞の死亡率が2.40倍、慢性リウマチ性心疾患の死亡率が全国平均の2.53倍で、どちらも全国1位になっている。

国では100mSV以下では科学的データがなく因果関係が解らないとして放射線の影響を認めていない。これは意図的に調べられてないだけなのだ。被害者が出ると「風評被害」で農作物が売れなくなるので行政やマスコミは極力被害を隠そうとする。また、放射線被曝と言えば、癌や白血病の発症しか報道されていないが、実は心臓病をはじめとしてあらゆる病気を発症させる原因となる。しかし、IAEA（国際原子力機関）やICRP（国際放射線防護委員会）は原発を推進する立場を取っていて、癌以外の影響は認めていないので日本政府も同じ立場を取っている。

日本の原子力規制委員会も「年20mSV以下は健康影響なし」と発表、被ばく対策が進むどころか、避難した住民を20mSV以下の放射能汚染地に戻そうとしている。日赤は原子力災害時の医療救護の活動指針として「累積被ばく線量が1mSVを超える恐れがあれば退避する」としている。また、2011年4月に内閣官房参与の小佐古敏荘・東京大教授（放射線安全学）は、年間20mSVを基準に決めたことに「容認すれば私の学者生命は終わり。自分の子どもをそういう目に遭わせたくない」と抗議の辞任をした会見で、「年間20mSVちかい被ばくをする人は原子力発電所の放射線業務従事者でも極めて少ない。

この数値を乳児、幼児、小学生に求めることは学問上の見地からのみならず、私のヒューマニズムからしても受け入れがたい」と発言した。(写真 25)



写真 25

2011.3.11 東電福島第一原発の爆発事故により放射能汚染が関東以北の太平洋岸一带に広がった。「安全」であったはずの原発がとんでもない事故を起こした。つまり、世界で唯一の被爆国ニッポン、核アレルギーの強い日本人に「核の平和利用」と説得し、「安全神話」を植え付けたが、自然の摂理によって原発利権集団のウソが暴かれたのだ。更に、原発が稼働する限り放射性廃棄物を出し続ける。つまり、地球を放射能で汚染し続けることになるのだ。

事故の責任者は、東京電力と原発政策を推進した政府にある。放射能汚染による故郷の山や土地などの自然環境及び地域のコミュニティなどの社会環境と住民の健康の全てが破壊され喪失した。これからも放射能汚染に気づかい、健康に不安を抱えながら生活しなければならない。それに対して政府はどのように責任を果たすのか。責任が明確にされないまま、あやふやな状況下で政府は原発再稼働を推し進めている。

更に無責任なことに東京電力は「飛散しまった放射性物質は東電の所有物ではない。従って除染の責任はない。」と詭弁を弄して責任を逃れ、それを裁判所は認めているのだ。安倍首相も「放射能汚染はすべてコントロールされている」と大嘘を言って東京オリンピックを誘致し、原発の輸出まで推進している。低線量被曝の健康障害に対しては、政府も東電ももともと救済する気はないのだろう。

私たちはあくまでも原発を推進した政府と東電の責任を迫及していき、全国の原発は廃炉にするしかない。それと同時に、民間レベルで助け合い、自分で自分の健康を守るしかないのが現状なのだ。

血液循環療法専門学院 〒5600013 大阪府豊中市上野東 3-18-1-308
 HP : <http://www.sikori.jp/> 「血液循環療法」で検索 ☎06-6846-2256